

■研究チーム⑦

学生のアウトカム形成支援と指標開発の試み

研究チームの研究課題名

学生のアウトカム形成支援と指標開発の試み

研究代表者およびチームリーダー

杉山 憲司 (社会学部社会心理学科・教授)

研究分担者名

研究員

迦部留 チャールズ (文学部英語コミュニケーション学科・教授)

小林 正夫 (社会学部社会文化システム学科・教授)

斎藤 里美 (文学部教育学科・教授)

篠崎 信之 (文学部教育学科・教授)

鈴木 哲郎 (ライフデザイン学部健康スポーツ学科・教授)

藤本 典裕 (文学部教育学科・教授)

研究計画の概要

本研究は、「高等教育におけるシティズンシップとキャリア・コンピテンシーの国際比較研究」の成果の上に立って、シティズンシップとキャリア・コンピテンシーを含む広い意味での学生の「学力」、即ち、専門分野に関する体系的知識およびその活用能力（スキル）の獲得とともに将来の職業と生活を通じて社会と関わっていくジェネリックスキル・コンピテンシー・態度を学生の主体的学びの過程で実践的に形成していくことを試みる。

具体的には、a. 「高等教育におけるシティズンシップとキャリア・コンピテンシーの国際比較研究」の議論を深め書籍出版を目指す。b. 法政・青山・立教と東洋の4校で形成された HART が、8月に法政大学で開催する学生 FD サミット（昨年度は立命館大学で開催）の成果について分析・検討する（学生の派遣を検討する）。c. 京都大学高等教育研究開発推進センターが試験運用している MOST (<https://online-tl.org>) に加入し、他大学交流、教員と大学院生の相互研修の実践的コミュニティの場としての利用を試みる。d. 指標開発としては、社会心理学科で試行しているラーニング・ポートフォリオ（学習評価）を、発達・学習過程のエビデンスとしてエントリーシートに活用する方途などについて検討を行う予定である。

当該年度の研究活動

研究チーム結成初年度に当たる 2010 年度は、研究目的の a. 「高等教育におけるシティズンシップとキャリア・コンピテンシーの国際比較研究」の出版計画、b. 本学の FD 推進センターと法政・青山・立教と 4 校で形成された HART の活動への研究的視点からの検討と支援、特に、学生 FD サミットへの参加学生との意見交換を行った。

a. 「高等教育におけるシティズンシップとキャリア・コンピテンシーの国際比較研究」の出版計画の検討について

この研究チームのメンバーの多くは、先行する 2 つの研究プロジェクト、「学生生活の質と大学満足度の研究（東洋大学現代社会総合研究所 2000～2002 年度）」及び、「大学生の Well-Being と大学生生活の QoL (Quality of Life)（東洋大学人間科学総合研究所 2004～2007 年度）」で共同研究してきた。その成果は、本学の出版助成を受けて、斎藤里美・杉山憲司（編著）2009『大学教育と質保証——多様な視点から高等教育の未来を考える』明石書店として公刊された。幸にも、2010 年 5 月に第 2 刷りを発行している。本書では、第 1 章 国境を越える高等教育の質保証とその課題（斎藤里美）、第 2 章 大学教育の質の保証と保障（藤本典裕）、第 3 章 大学教育／学習論（杉山憲司）、第 4 章 大学教育と学生相談（篠崎信之）、第 5 章 都会型大学におけるキャンパスアメニティ（鈴木哲郎）、第 6 章 地域連携型の大学教育とその展開（小林正夫）が執筆している。そこで、新たなプロジェクト、「高等教育におけるシティズンシップとキャリア・コンピテンシーに関する国際比較研究（東洋大学人間科学総合研究所 2007～2009 年度）」の研究成果、具体的には、シティズンシップおよびキャリア・コンピテンシーに関する理論的・社会的背景、シティズンシップとキャリア・コンピテンシーに関する国内外の実践、シティズンシップおよびキャリア・コンピテンシーに関する学生および教員の意識調査、及び、シティズンシップおよびキャリア・コンピテンシーに関する国際比較——国際シンポジウム、以上について研究し報告書をまとめた。この研究分担者には、先の執筆者に加えて、阿部祐子（国際教養大学）、迦部留チャールズ（東洋大学文学部）、木内明（東洋大学ライフデザイン学部）、近藤まり（立命館アジア太平洋大学）の諸氏に参加戴いた。そこで、新たな章を 1、2 付け加えて改訂版を出すこととして合意をし、2011 年度の出版を目指すことにした。既に、迦部留先生からは、ご専門を生かして担当いただける章立て案を戴いており、2011 年度に早急に具体化する予定である。

b. 法政大学・青山学院大学・立教大学・東洋大学の 4 校で結成された関東圏 FD 連絡会（略称 HART）の活動について研究者・教員の視点からの活動の検討と支援。及び、学生 FD サミットへの参加学生との意見交換と今後の活動への支援の可能性について

学生 FD サミットは立命館大学教育開発推進機構・立命館大学学生 FD スタッフが主催して、夏冬の年 2 回開催している。杉山は 2010 年の冬に参加している。東洋大学生の参加に当たって、当初は、研究チーム予算を旅費の一部に充てる予定であったが、急遽、FD 推進センターの予算を使用できることになった（恒久的）。2010 年夏の参加者は、斎藤先生、他 7 名の学生で（院生 1 名を含む）、立命館大学衣笠キャンパスで開催された。主な内容は、各大学出席者とのしゃべり場・懇親会、大学教

育改善についての意見交換、各大学の学生 FD の取り組み発表、グループワーク（大学教育と高校教育、どんな授業を望んでいるか、学生生活を充実させるには、成績評価、大卒の意味）などが 2 日に渡って展開され、最後にグループ発表をした。参加しての感想には、FD 活動は教員（職員）と学生で推進するものだ、学生参加型 FD に唯一のモデルはなく、各大学の創意工夫と多様な取り組みが大切、他大学との大学間交流とコミュニケーションが最重要と述べている。また、参加された斉藤先生は、学生たちが自分の大学コミュニティだけでなく、もっと広い世界で交流し、活躍できるよう励ましていきたいと述べられていた。今後の課題としては、教育学科の中心メンバーを軸に、東洋大学内に、FD 活動チームを立ち上げたい、立命館大学のバイタリティに負けないように、これからも積極的に頑張っていきたいとのことであった。その後の経過は、法政大学で開かれる予定の学生 FD サミットに積極的に参加し、企画案も出していたようであるが、3.11 の震災で中止になってしまったのは残念である。今後の活動を期待したい。

学生 FD サミットに対する、今後の活動への支援の可能性としては、大学授業改善については、学生による授業評価が先ず実施され、その後、FD 活動、SD 活動（大学職員の FD）、そして学生の FD 活動への参加という流れが考えられる。今後は、学生のアウトカム評価が求められるなど、視点が教員の教育から、学生の学び即ち学習とその自己評価へと軸足を移しつつあると考えている。即ち、学生の自発的、自律的な学びをいかにサポートするか、そのための学習環境を整えることが急務であり、この環境には、人的・制度的・物理的（キャンパスおよび教育情報環境を含む）環境整備が含まれると考えている。